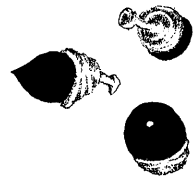


# 私の「図工」 事始<sup>はじめ</sup>

永倉みゆき



十一年ぶりに、長いこと馴染んでいた幼稚園の世界から、小学校へと転任となった。私にとって、幼稚園とは、子どもと共に暮らし、共に発見し、共に育っていく世界であった。身も心もその楽しさにどっぷり浸っていた私には「教える」ことが前提としてある小学校には、なかなか自分の居場所が見つけれなかった。

国語、算数、といろいろある教科の中で、一番苦痛だったのは、図工の時間だった。私自身描くことが苦手な訳ではない。むしろ反対に、幼稚園では、子どもと一緒に描いたり作ったりすることが、何より楽しみだった。なぜなら子どもは、ふとしたきっかけで作り出ししばらく熱中した後、完成したものを使って遊ぶなり、満足して次の遊びに移るなりして自ら「終わ

り」を決めていくのが常で、それが大人から見てもう少しやればもっとすてきになるものであっても、あまりに上手にできて使って壊したくなくなるものであっても、「終わり」になれば、もう「終わり」であって、惜し気もなく次へと向かっていったからである。その潔さ。思い切りの良さ。作りたいから作る、自分のために作る、子どもの「作る姿」は人がものをつくる原点を思わせ、私の心を揺すぶらずにはおかなかった。

ところが、学校での図工の時間は決められており、その中で、決められたテーマに沿って絵をかき、ものを作る。するとどんな楽し気なテーマでも、気の乗らない子は必ずいる。また、今日家に帰ってからの誕生会のことや頭を占めていて、気もそぞろな子もいる。休み時間に捕りそこねたバッタの行方が気になって仕方ない子もいる。

低学年の年齢では、同じ時間内に全ての子がやる気になって絵を描くことは難しい。しかし、それぞれが

描きたい時にそれぞれのペースで絵に表現することをしていたら、図工の授業というものは成立しなくなってしまう。

描きたい気持ちの時に描けない、又は描く気がないのに描かねばならない。それなら絵は何のために描くのか。幼稚園の子ども達が、「もっと描く。紙ちょうだい」とせがんだ、あの気持ちは、どこにいってしまったのか。そんなことを考えると、表面上は賑やかで楽しい気に見える図工の時間が、楽しいばかりのものではなくなくなってしまふのだ。

絵を描かせようとする時、大人の頭には良い絵を描かせることばかりがあるが、子どもにしてみたら何か楽しさに満ちた出来事があり、楽しいからこそ何かに表わしたくなるのである。表現するということは、真に個人的な感情から始まる行為なのだ。だから幼稚園の年少の子であれば、満足した絵はまちがいになく、「おうちに持って帰る」と言うだろう。すてきなものは、身から離さず大事にしたい。または、大好きな人

に見せたい。それが自然な姿ではないだろうか。大人でも、自分が満足いくように仕上がったものは、一番わかってくれそうな人に見せたくはないか。

それなのに、一年生達は、自分の描いた絵を「見て、見て」ではなく、「これでいい?」と見せに来る。「すごいでしょ」ではなく、「もう、描けた」と見せに来る。子ども達は言外に、「この絵、よくできています? もう終わりにしていい?」と、先生である私に聞こうとしているのである。私は、ここに、学校で描かせる絵の限界もまたあるように思う。

\*

私が図工の時間に、子ども達にしてあげられることとして一体何だろう……。それがちともわからずに悶々としていた日々の中で、どの学校でも行なわれる「絵をかき会」が九月にあり、一年生は動物園で動物の絵を描くことになった。秋晴れの空の下、子ども達は、大喜びで好きな動物の所へ駆け出して行った。そ

して、描き上げた絵と共に、私の迷いや悩みにいろいろな形で答をくれたのだった。

どうしたらいい? — たかひろ —

たかひろは、自分を表にすつと出すのに、ためらいのある時期にあり、このころは、日記でも絵でもお話でも、他の子が終わってしまったても、与えられた紙がまっ白のことが多かった。

この日も、二、三人の友達と、早ばやとオランウータンのおりの前に場所をとったものの、殆どの子が仕上がる頃になっても、まだ顔のりんかくと目しか描いてなかった。「先生、どうしよう」とすがられても私は、「まだ大丈夫。どういう格好かよく見てごらん」と繰り返しすばかり。多分、私は自分の言葉の影響で、たかひろの絵



が私の絵にすりかわってしまふことが怖かったのだから。たかひろが一体何をどう描こうとしているのか、私にはわからなかったから。

そこに、絵を仕上げたみなみが来た。みなみは必ずしも絵が得意な子ではないが、友達の気持ちを敏感に感じ取れる子である。たかひろの様子を見て、何かしてあげたいと思ったのか、ごく自然に「手をさ、こうして、こうのぼしてつかまっているから、それを描けばいいじゃん」と言ったのである。「どうやったらいい？ どう描こう」とたかひろ。するとみなみは、ズバリとひと言、「手を、こう、ぐうにすればいいんだよ」と言ったのである。不思議なことに、普段なら、いろいろ言われても納得せず、なかなか描こうとしないたかひろが、そのアドバイスで見事、立派にぶら下がった手を描き上げたのである。

これには、私の方がびっくりしてしまった。私なら、つい言いすぎたり、ピントはずれになってしまうところである。みなみには、たかひろが何を困ってい

るのか、何を言えばわかるのかがわかったのだろう。

子ども同士で教え合う時、みなみのように、大人が言うよりずっとわかりやすく教えることを、私は幼稚園で何度も経験している。「こう言ったらどうするだろう」「どう言ったらうまく伝わるだろう」という余計な考えがないため、逆に、的確なアドバイスができるのかもしれない。身の丈に合ったアドバイスだからこそ、みなみの言葉がすっと腑に落ちて、たかひろは続きを描き上げられたのであろう。

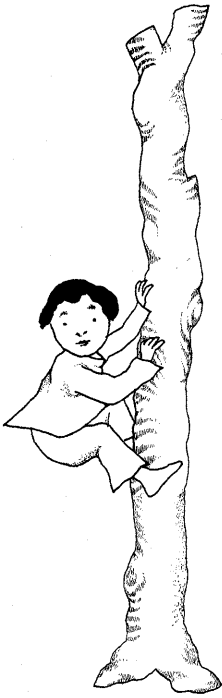
やさしさに満ち、また核心をついている「子どもの教え方」には、教わることが多い。

### 今は描く気がしない——ゆり——

ゆりはバードハウスで鳥を描いていたのだが、「できた」と言って持って来た絵には、真中にいていねいに描かれた鳥が一羽。絵としては画面が寂しかったので、「こんなにたくさん鳥がいるんだから、友だちの鳥を描いてあげたら」と言うと、しばらく考えて、言

葉を探してから、「今は描く気がしない」と答えた。

今思い返せば、素直なゆりらしい言葉だとわかるが、その時は、「いや」「もういい」と言われた時以上に、はっとさせられた。当日は、暑かったし、まさに言葉通りの意味だったと思う。その時まで私は、絵を描く、ということのみ頭にあって、どうしたら、良いアドバイスを与えて、絵をよくしてあげられるのか、そのことばかり考えていたのだ。ゆりにそう言われて初めて、子どもは、絵を仕上げるために来ているのではなくて、動物園で絵を描くことを楽しみに来ているのだと改めて気付かされた。



描くことに疲れてしまった子たちは、絵が途中で、あちこちを眺めたり、他の動物を見に行ったり、何人かでふざけ合ったりして、「ほらまだ描けてないでしょう」と、何度か言われていたが、その子たちが言葉にできなかった思いを、ゆりはずばりと言ってくれたのである。

子ども達は集中して描いた後、ふざけたり、ぼんやりしたりしながら、体や心のバランスをとっていたのだ。それは決してやる気がないのでなく、ゆりの言葉通り、「今は、描く気がしない」状態だと、体や心が訴えていたのだろう。

小学生になっても、中身は同じ子どもである。だだをこねたり、すねたりにもちゃんという意味があり、何かを訴えているのである。私達大人がこれは身に付けて欲しいという願いを持って関わる時、時として、子どもの本心を見ようとせず、何事も「がんばれ」と言ってしまうことはないだろうか。ゆりのひとことは、「今はがんばりたくないだよ。わかっているけどできないの」と、私には聞こえた。

ゆりのように、できない気持ちを言葉にできる子が、学級に何人いるだろうか。幼稚園に勤めていた時、「おいで」と言っても来ない子、「やろう」と言ってもやらない子は、大切な、クラスのバロメーターだよ、と言われたことがある。はじめは何のことかわからなかったが、自分の思いを素直に出して動いてくれる子が、本当はそうしたいけどできない、何人もの声を代弁してくれている。

子どもが、動物を見て大はしゃぎして、絵に表している途中で、疲れちゃった……それはごく当たり前の

ことであろう。ゆりの言うように「描く気がしない」状態で、がんばって描いたら、絵は仕上がるだろうが、喜びはどうなってしまったのだろうか。自分の喜びではなく、他者の期待に応える喜びにすりかわってしまふことは、ないのだろうか。ゆりの言葉にそんなことを考えた。

\*

私はこの子たちに教えてもらった気がする。絵は、描く気がない時は描けないこと。描く気がある時は、アドバイスがきちんと納得して受け入れられること。また、それが無理なく喜びのある絵につながる。おそらく、その接点にこそ、私が大人として、また先生としてできることがある。そして、それを越えてしまふと、絵を描くことが、楽しみではなく、お仕事になってしまふ。よく描こうとがんばることは、表現したい気持ちがあつて初めて、その子の中に意味あることとして成立する。それは、幼稚園でも小学校でも、

大人であっても同じであろう。

学校で絵を描く時は、先生がはっきりした意図をもって関わるため、その意図に沿って描けるようになることが、子どもの表現力の伸びだと捉えてしまいがちである。しかしそれは、必ずしもそうとは言えない。確かに描くことは、それだけで気持ちのよい楽しいことだし、絵を描く楽しさの中で、今までの自分を越えるような描き方や見方が身に付くことは嬉しいことだ。しかし、それでもなお、できた絵が、自分の思いとずれてしまうことはある。子どもの「描きたいもの」と、先生の「描かせたいもの」そして「描く技術」、その三つの関係をきちんと把握して子どもの絵に臨まなくては、私達は誤ってしまう。絵を描くのが、自分の思いを抑えてまで先生の期待に應えることになってはならない。だからこそ、「今は描けない」という声にも十分耳を傾ける必要があるだろう。「描くこと」が、真の意味で自分自身になることにつながっていくためにも。

「子どものすることには、無駄なことはひとつもない」——これは、私の尊敬する人が言われた言葉だ。大人にとってどんなに困ることも、子どもが思うするには、するだけの意味がちゃんとある。私は、ガンと頭を殴られるような思いでこの言葉を聞き、忘れないよう心して、日々の保育にあたってきた。小学校に来たことで、あやうくこの言葉を見失うところだった。小学校でも子どもは同じ。幼い子が遊びの中でそうするように、学びの中で、自分の思いを出し、時には迷い、時に確かめしながら、より自分らしくなっていくのである。先生である私は、それを支えることができる。できればいい。

子どものすることには、無駄なことはひとつもないんだ。再びそう思って子どもと向かい合えた時、私にとっての「教えること」が、始まった。

(静岡県公立小学校)